

## 全盲のダウン症幼児の初期的な触探索的動作に関する事例的研究 ー造形活動に視点をおいてー

阿部 富和

### I 問題と目的

#### 1 重度・重複障害児の造形活動

重度・重複障害をもつ子ども達は、「触覚防衛」の状態に陥っていることが多く、「触れる」ことに問題を示す場合が少なくない。皆本（2004）は、そのような子どもたちは、素材に触れることに問題を示すだけでなく、ものとのかかわりのゆがみから、対人関係にもゆがみを作ってしまう、と述べている。しかし、V. ローウェンフェルド（1957）は造形活動、とくに粘土を扱うことによって、このような状況から子どもたちを解放させることができるとし、造形表現においては自分の全身によって刺激を受け取っていくこと＝「全身経験」以外に方法はないと述べている。また、盲目の人達の造形とイメージの作り方が、探索的動作から得られることや、探索活動そのものが初期的造形行為であることが、奥（2002）らの研究から示唆されている。

本研究の事例対象児A（以降A児とする）は触覚防衛が強く、自発的な探索動作や素材をもてあそぶ動作はほとんど見られなかったが、携帯用小型扇風機の回転するウレタン製の羽根に指先で触れるという様子が見られた。このことから、ろくろの回転運動の中で事物に触れ、さらに探索的に手が動くように様々な形状の「モノ」を導入すること、また、粘土をその素材として用いながら造形活動を行うことにより、A児の触探索的動作の表出が促されるのではないかと考えた。

#### 2 目的

- 1) 様々な形状の「モノ」にろくろの回転運動の中で触れる活動を行い、触探索的動作の表出を促す条件について検討する。
- 2) ろくろで回転する小麦粉粘土に触れる「造

形活動」を継続的に行い、触探索的動作の表出を促す条件について検討する。

### II 方法

#### 1 対象児

早期療育施設に通園する4歳の全盲のダウン症幼児

#### 2 手続き

活動Ⅰ期：ろくろで回転する「モノ」に触れる。

活動Ⅱ期：ろくろで回転する粘土に触れる。

活動Ⅲ期：トランポリンの上下の揺れの中で、ろくろで回転する「モノ」に触れる。

上記の活動をすべてVTRに記録し、分析の資料として活用する。資料の収集は2006年2月から2006年9月までの間、J大学障害児教育実践センターでの12回の活動場面と、A児が通う早期療育施設における13回の活動場面を合わせた計25回の活動場面において行った。

#### 3 資料分析の方法

大内・中田（1999）は、全盲児及び遮眼した晴眼児を対象に、形と肌理、大きさをハプティック知覚で弁別する時に出現する手指の使い方を観察し、EPs（探索法；exploratory procedures）の変化や探索の方略が全盲児においても晴眼児との共通性があることを示した。本研究では、この探索法を参考にA児独自の探索法について分類し、それをもとにしてA児の触探索的動作について分析することを前提とする。

##### 1) 連続動作について

A児が示した触探索的動作が含まれる連続動作場面を、資料となるすべてのセッションから抽出し、その時の画像とA児の触れ方の状況をトランスクリプトで示し、「モノ」に応じたA児の触探索的動作の特徴と方略等について分析

する。

## 2) 触れた時間と回数について

A児がろくろ上の「モノ」や「モノ」以外の部分に触れた時間（秒）と回数を計測し、時間的尺度からの分析を行う。また、造形活動期に観察された連続動作場面の各探索法の割合や推移について分析する

## III 結果

A児が「モノ」に触れた様子を概観すると、1回あたりに触れている時間の長短の差はあっても、すべての「モノ」に対して、ほぼそれぞれの形状に沿った手の形、指の形で触れることができた。中でも曲面形状に対する触れ方は、その曲面にのみ手を定位しておくだけでなく、そこから更に手を動かしたり、指先を変化させたりするなど、より探索的になる様子が確認された。「モノ」の大きさに関していえば、手の中に収まるような大きさの「モノ」よりは、手の中には収まらない「モノ」の方が、より探索的に手や指を動かしている様子が確認された。また、曲面形状においても、反った棒の上部の「縁」に見られるような、際だった形状が含まれるとより探索的に動いていく様子が確認された。

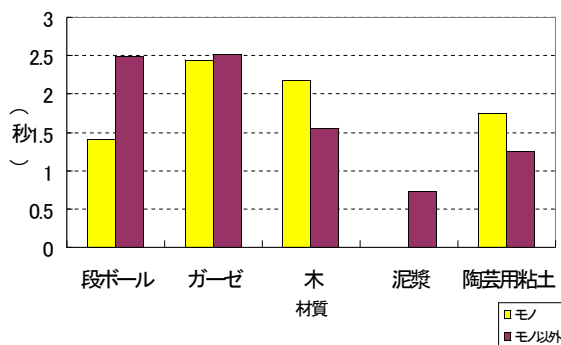


図1 活動I期 1回あたりに触れた時間<材質ごと>

材質に関しては図1にあるように、段ボール、ガーゼ、木などの比較的硬質の素材と比較すると、泥漿、陶芸用粘土などの軟質な素材の方が、1回あたりに触れている時間数が少ないことがわかった。中でも泥漿に関しては、1回あたりに触れている時間数が最も少ない上に、中心部の「モノ」にまで手が探索的に動かなかったことがわかる。しかしながら、陶芸用粘土に関しては、周辺部の

「モノ」以外の部分よりも中心部の「モノ」に対して触れている時間が長いことがわかった。

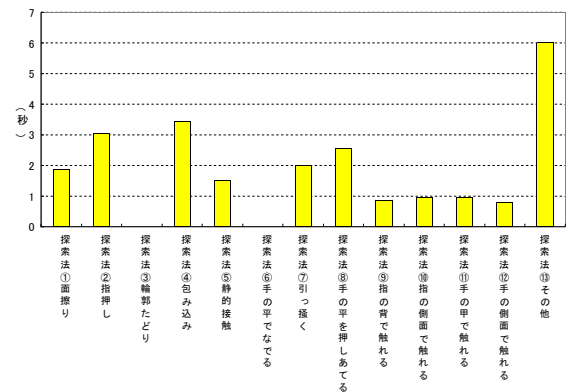


図2 活動II期「粘土円柱」セッションにおけるA児が1回あたりに触れた時間

造形活動として行った活動II期の「粘土円柱」セッションにおいては、図2にあるように、1回あたりに触れた時間数が最も多いのは、探索法③<その他>の6秒であったが、この内で最も時間数が多かったのは、手をこぶし状に丸めて「粘土円柱」にあてる、というもので、回数は少ないものの、最大値では25秒という場面が観察された。その他に手首の付け根で触れる、手の平で叩くという触れ方も見られた。次いで1回あたりに触れている時間数が多かったのは、探索法④<包み込み>であった。触れた回数は「粘土円柱」セッションの全体で3番目に多く、時間数に関しては2番目に多い数値であった。その次に多かったのは、探索法②<指押し>と探索法⑧<手の平を押しあてる>である。この2つの探索法と探索法⑬<その他>の触れ方は、活動I期で触れた「モノ」では観察されなかった触れ方であり、「粘土円柱」の表面素材である小麦粉粘土に対しては、圧力を加えて形状を変化させるという触れ方を示したことが窺える。

## IV 考察

A児の触探索的動作を促す「モノ」は、曲面形状で手の中には収まらない大きさのものであったと考える。そして程度の際立ちには十分な注意が必要だが、その曲面には、鋭角な部分を含むような「モノ」が有効だと考える。材質に関しては、A児の場合、軟質なもののよりも硬質なものへの触れの方が抵抗感が無いことがわかったが、小麦

粉粘土のような軟質な材質でも、「粘土円柱」セッションのところで観察された探索法をみれば、十分に触探索的動作を促す素材になると言える。いずれにしても、こういった「モノ」を介した活動を進めていく中で、全盲のA児が実に繊細な探索をしており、繊細で敏感であるからこそ、「モノ」に触れたわずか数秒の時間に神経を集中し、その中で様々な連続動作を示しながら「モノ」の形や変化を推測しているということがよくわかった。

今回、活動Ⅱ期を中心とした「造形活動」の中で、A児は確かに「粘土円柱」の表面を変化させ、その感触の違いを味わうような様子が見られた。そういった意味では、ろくろの回転運動という条件と制作の手順により、確かに造形活動は成立したといえる。しかし、「粘土円柱」セッション全体でいえば、まだまだ触探索的な動作を示す時間は短く、触れ方の方略も未熟であることがわかった。そういった触れ方の時間的、質的な深まりをすすめるためには、A児なりの触探索上の好みや、特徴などを十分に検討した上で、「触れる」活動をすすめていかなければならない。今回は、素材に触れるという活動が必然的に多く含まれる造形活動に取り組んだが、造形に必要な様々な触れ方を導き出すことに力点を置くあまり、A児が探索法にかかわらず「触れたい」ための状況作り、という面は弱かったように思う。これについては、板井（2003）が述べているように、「手指を働かせながらその感動を誰かと共有する」ことや、土谷・菅井（2000）が述べているように、子どもと造形活動という二項間に留まった状態ではなく、それが係わり手も含めた、「喜びに満ちた相互的・共同的活動（joyful shared event）」における関係の中で検討されることも必要ではないかと考える。今後は係わり手と子どもとの相互的やりとりを中心においた造形活動についても検討していきたい。

今回、7つの作品をA児は制作した。しかしながら、作品を保存し、後から表面の凹凸や質感を味わうといった活動を行わなかったのも、A児に

としては、それが自分の作品であるという実感を十分に持つことができたのか疑問が残る。造形活動の締めくくりとして、自分の制作した作品の表面に触れるという鑑賞の機会を作り、A児の触れ方を見てみる必要があるかもしれない。そういった確認＝鑑賞の機会を持つことが、自分の感覚を伴った現実感、リアリティーを生み、自分が何らかの形で材質を変化させ、外界とつながったという実感を持つことにつながるのではないだろうか。全盲で言葉がないため、触れることによって形状をイメージするしかない子どもにとって、「触れる」という行為は大変重要な意味を持つ。それが探索であれ、意思の表出であれ、「触れる」ことを止められること、「触れる」経験が少ない状況下におかれることはこのような子どもたちにとって外界とのつながりを絶たれるかどうかの死活問題となる。どんな些細なことでも「触れる」ことを通して世界が広がると信じ、「触れる」機会を少しでも多くもてるように係わる必要があると考える。

## 文献

- 板井 理（2003）造形表現能力の発達の道筋，*みんなのねがい*，427，76-83.
- ローエンフェルド V 深水正策（訳）（1957）盲児・聾盲児および精薄者たちと創造活動1，*教育美術*，18（10），9-17.
- 皆本典子（2004）重度・重複障害のある生徒の意思の表出を喚起するための支援の在り方，*広島県立教育センター／教員研究シリーズ*，51，113-120.
- 奥 美佐子（2002）造形活動の初期的行為としての探索活動－造形遊びと比較検討する－，*名古屋柳城短期大学研究紀要*，24，75-87.
- 大内 進・中田英雄（1999）形と肌理と大きさの弁別課題における全盲児のハプティック知覚，*筑波大学リハビリテーション研究*，8(1)，15-24.
- 土谷良巳・菅井裕行（2000）ネゴシエーションの視点から見た初期的コミュニケーション－先天的な盲ろう二重障害におけるコミュニケーションをめぐる－，*国立特殊教育総合研究所研究紀要*，27，77-88.